

1937年から1938年の間に日本で開催された日独交流展

—美術作品と政治性をめぐり—考察—

安松 みゆき

はじめに

1930年後半のドイツ第三帝国は軍事政略として日独防共協定を締結するなど、日本と密接な関係を結んでゆく。そのような動向と並行して日本で交流展にあたる展覧会が開催された。それもかなり集中して3つの展覧会が1937年からわずか1年の間に実施されている。1937年4月の「獨逸國寶名作素描展」と同年11月の「日獨文化展覧會」そして翌1938年の「大獨逸國展覧會」である。管見では従来これら交流展については、たとえば1939年のドイツで開催された「伯林日本古美術展覧會」の開催経緯として「獨逸國寶名作素描展」と「大獨逸國展覧會」が紹介される例がみられるものの、まだ詳細な研究対象としてとりあげられるまでには至っていないように思われる¹⁾。本稿ではこれら3つの展覧会を各展覧会目録を参照しつつ概説し、美術作品は文化交流の展示という文脈のなかでいかなる意味を持ち得たのかを、特に政治性に留意しつつ考察する。

第1節 1937年「獨逸國寶名作素描展」の概略

本稿でとりあげる3つの交流展の中で時期的に最初に開催されたのが「獨逸國寶名作素描展」である。この展覧会は題名通りに美術展で、1937年4月30日から5月14日まで上野公園の東京府美術館で開催された²⁾。『日獨文化協會創立十周年記念、獨逸國々立美術館出品、獨逸國寶名作素描展目録』（以下『目録』と略記）によると、展覧会は日独文化協会が創立十周年を祝ってドイツからの要望によって実現された。主催は日独文化協会と朝日新聞社だが、後援がドイツ政府、外務省、文部省のために、展覧会の政治的な面がうかがえる。開催目的は、上記の如くに日独文化協会創立十年を記念していることになるが、さらに開催に際しては『目録』に掲載された日独文化協会会長大久保利武による「序言」に、「両国間の文化交換と国際親善とが一層拡大強化せられること」とあるように、1938年に日独文化協定が提携されることも視野に入れている。

日本側で関与したのは日独文化協会であり、一方のドイツ側では文部省をとおしてベルリンの博物館群総長キュンメル教授、宣伝省、国立博物館銅版画部長ウインクラー教授、副部長マーレ、国民美術館長ハンフステンゲルが関わった。

出陳された作品はマーレがドイツから持参したとされる。そのことからわかるように、

展示作品が素描に限定されたのは、素描ならば持ち運びが容易であるという運搬上の利便性が優先されたためであった。『目録』に記載されたドイツ語の題名は「Handzeichnungen Deutscher Meister von Dürer bis Menzel」とあり、「デューラーからメンツェルまでのドイツの巨匠の素描」と訳出することができる。つまり、作品はデューラーのドイツルネサンス時代から、メンツェルの近代印象派の時代までに制作されたものである。作品総数95点のうち主な作品は以下の通りである。

アルブレヒト・デューラー	《若き男女の図》	1490-94年頃	ハムブルク美術館蔵
アルブレヒト・デューラー	《ニュルンベルクに近きカルクロイトの谷》	初期の水彩画	ベルリン銅版画蒐集館蔵
アルブレヒト・デューラー	《婦女の像》	ドイツにおける最初の木炭画、1503年、	ベルリン銅版画蒐集館蔵
ハンス・ホルバイン	《レオナルド・ヴァグナーの像》		ベルリン銅版画蒐集館蔵
ハンス・ホルバイン（二代目）	《聖母子像》		ライプツィヒ美術館蔵
マティアス・グリュネヴァルト	《聖カタリナ》		ベルリン銅版画蒐集館蔵
ハンス・バルトウング・グリーン	《左手に球を翳せる女》		ベルリン銅版画蒐集館蔵
アルブレヒト・アルトドルファー	《荒海を航行する帆船》		エアランゲン大学図書館蔵
ヴォルフ・フーバー	《風景》		エアランゲン大学図書館蔵
カスパー・ダーヴィド・フリードリヒ	《テーブリッツなる城山を望む》		ベルリン国民画廊蔵
カール・フリードリヒ・シンケル	《トリエスト近傍カルスト山中のリューク城》		ベルリン・ラウハ・シンケル美術館蔵
カール・ブレッヘン	《伊太利公園風景》		ベルリン国民画廊蔵
オットー・ルンゲ	《海上のキリストとペトルス》		ハムブルク美術館
モーリッツ・シュヴァイント	《美しきラウ》		ミュンヘン国立素描版画蒐集館蔵
フリードリヒ・オーヴァーベック	《女の顔》		ハムブルク美術館蔵
ユリウス・シュノス・フォン・カルロスフェルト	《裸婦》		ドレスデン国立銅版画蒐集館蔵
ゴットフリート・シャドウ	《歌神の頭部》		ベルリン美術院蔵
アドルフ・メンツェル	《ポツダム・サンスーシー宮内のフレデリック大帝書斎》		ベルリン国民画廊蔵

こうした出陳作品にはいかなる特徴があるのかを理解するために、展覧会に出陳された作品群を「表1」にまとめた。その表を参照すると、出陳作品の作家名からは、たしかにデューラーをはじめ、ホルバイン、グリュネヴァルト、フリードリヒ等の著名なドイツの画家を見出すことができる。しかしその一方で、若干ではあるものの、現在でもあまり紹介される機会のない作家、たとえばヴェヒトリン、ヴァイディッツ等も見られる。また

ルネサンス時代においてクラナハが、近代では古典主義のベックリンやハンス・フォン・マレーズ等が欠落している。

さらに作家毎の作品数からみると、まず基本データは以下のようなになる。ドイツルネサンスの作家ではデューラー10点、デューラーと思われる作品2点、ハンス・ホルバイン初代3点、ハンス・ホルバイン二代4点、ハンス・ブルクマイアー2点、グリューネヴァルト1点、ハンス・バルトゥンク・グリーン5点、アルトドルファー3点、アルトドルファーと思われる作品2点、ヴォルフ・フーバー6点、フーバーと思われる作品2点、ロマン派の作家ではカスパー・ダーヴィド・フリードリヒ1点、アントン・コッホ1点、カール・フリードリヒ・シンケル1点、ナザレ派の作家ではフリードリヒ・オーヴァーベック2点、ゴットフリード・シャドウ1点、歴史画家ではモーリッツ・シュヴァイント2点、近代風景画家ではカール・プレッヒェン2点、ドイツ印象派のアドルフ・メンツェル8点、となる。

これらのデータから作品数の最も多い作家はデューラーであり、次いで曖昧な2点を含む8点のフーバー、同じく8点のメンツェルを抽出できる。そのために数の上では、この三人の作家が、いわばこの展覧会の中心的な立場にあったといえる。またデューラーの作品は10点を数えるが、その年代は初期のものから晩年までが選ばれており、作品のテーマも風俗画から風景画、宗教画と多面的に紹介されている。つまりデューラーに関してはその全体像を明示しようとしているといえる。デューラーに次いで作品数の多いヴォルフ・フーバーの場合には、展覧会においてデューラーの影響を受けた画家として二義的に扱われている。アルトドルファー、グリーンなどの著名な作家の存在も、同様にデューラーの影響の下で活躍した画家として解説されている。すなわちこの展覧会ではドイツルネサンスの作家が多く紹介されているものの、その際に年代順に展示されているわけではなく、デューラーを頂点とするドイツルネサンスの理解が提示されていた、と解される。また、ルネサンス以降は19世紀の作家の作品が多く、バロックのアダム・エルスハイマーなどが欠落している³⁾。これらを勘案すると、一部に欠落する作家があるものの、ドイツルネサンスから近代までとはいえ、特にルネサンス時代と、ロマン派から印象派までの近代に集中した展覧会ということが出来る。この両時代は特に、ドイツ出身の著名な作家を多々輩出しており、そのためにドイツ美術の特徴を示す内容になったといえる。

さらに、素描や水彩の作品に限定されていたことも、この展覧会の大きな特徴である。たしかに巨匠の作品群が多く含まれているものの、展覧会には油彩画は一点もなく、すべてがペン画、毛筆画、木炭画、水彩画であった。展覧会の開催を希望した日独文化協会は、当初より素描展を考えていたわけではなかった。『目録』の「序言」には、日独文化協会が当初の展覧会の希望を出したときには、「獨逸國絵画展覧會開催」と記されているからである⁴⁾。それゆえに素描展は日本側の意向とは異なった結果だったということがわかる。

第2節 1937年11月開催の「日獨文化展覧會」の概略

日独文化協会創立十周年の記念としてさらに1937年11月10日から16日までの6日間、日独文化協会の主催の下、早稲田大学演劇博物館において「日獨文化展覧會」が開かれた。日独両国の親善に貢献することを目的に、副題にあるように日独文化資料とされるおよそ1171点の作品が出陳された。それらの大半が日本に所蔵される江戸期より同時代までのものである。『日獨文化展覧會出品目録』（以下『文化展目録』と略記）によれば、作品群は具体的に、日本書志、獨逸学、地理、医学、軍事関係、哲学、法律哲学、経済学、美術工芸、音楽、諸家出品の11部門に分類されて展示された。たとえば、日本書志には、早稲田大学図書館所蔵でドイツ人の著書の最初の翻訳とされるトマス・ア・ケンピスの『神に倣いて (Imitatione Christi)』の復刻本、獨逸学では、入澤達吉所蔵のエンゲルベルト・ケンペルの碑を撮影した写真、山岸光宣所蔵のフローレンツ訳『日本詩歌集』、日独文化協会所蔵の東京学半社発行版『宇和袖珍辞書』(明治5年)、同所蔵のゲーテ著草野柴二訳『ヘルマン、ウント、ドロテヤ』(明治34年)などの330点、地理では秋岡武次郎所蔵の『華夷通商考』(1695年)、同所蔵のクルーゼンステルン長崎來舶関係の銅版および地図(1814年)などの102点、医学では長興又郎所蔵の『Anatomische Tabellen (解体新書の独語原本)』、東京帝国大学解剖学教室所蔵の明治初期に輸入された獨逸医書、主として解剖学関係書『Dr. Friedrich Tiedemann, Das Hirn des Negers, i Vol, 1, 1837.』などの84点、軍事関係では有馬成甫所蔵のブラウンの臼砲々架組立図写真、三兵戦術関係偕行社文庫所蔵のメッケル中尉著『メッケル兵棋学』(独語1873年)など306点、哲学では、武藤長蔵所蔵『カント人性論』(1799年版)などの20点、法律哲学では、伯爵伊東治正所蔵の伊東己代治筆『斯丁氏講義筆記』(明治15年)などの78点、経済学では、東京帝国大学経済学部研究室所蔵の滝本美夫解説ワグナー筆『財政学』(明治37年)などの143点、美術工芸では帝室博物館蔵の亜欧堂田善筆《ゼルマニア廊中図》《コロンブス謁見図》などの23点、音楽では山岸光宣所蔵のグルック作『歌劇オルフォイス上演記念帖』(明治36年)などの10点、諸家出品では水戸彰考館所蔵の『蘭独字典』などの116点が数えられる。この諸家出品のなかには酒井宇吉氏所蔵の《ヒットラー総統書簡》が含まれている。この展覧会への政治的関与についてはなにも記されていないが、ヒットラーの書簡の展示によって展覧会の政治性が暗示されている。

さて、こうした様々な分野が紹介されたなかで美術工芸の分野では、帝室博物館蔵の亜欧堂田善筆の作品が5点、岡村千曳所蔵の『銅版画帖』と宇多皮棒斎著《医範提綱付図》、東京美術学校所蔵の長崎画家若杉磯八筆《鷹匠の図》、藍原又策所蔵《柿右衛門写葡萄に栗鼠文様マイセン陶器》、ドイツに学位論文を提出した山田智三郎が撮影したと思われる写真、すなわちヴィルヘルム選定侯が日本に注文した2作品の内の1つである16世紀の《日本製高蒔絵楯》の写真も展示されていた。これらは主に工芸品が中心であり、またドイツから影響を受けた側面を保持するものである。そのなかに2点の洋画が認められる。原田直次郎の油絵並に同氏自画像(原田熊雄所蔵)と記された作品である。この2点はこの展

覧会において唯一展示された絵画作品であった。『文化展目録』には、原田が明治17年にドイツ・ミュンヘンのガブリエル・マックスに師事し、かれの作品はドイツ風で色彩と筆触に優れていたと説明されている。ガブリエル・マックスは後期ロマン派の画家で歴史画家として知られるが、絵画活動の一方で、人類学や心理学などの研究も深めてゆき、のちに猿を頻繁に描くことになる画家としても認識されている⁵⁾。そのために19世紀後期の典型的なドイツの画家というよりも、特異な特徴を示すひとりというべきであろう。それは前述の「獨逸國寶名作素描展」に展示された19世紀の作家にメンツェルやシュヴァイトはとりあげられながら、ガブリエル・マックスの名前が見当たらないことから裏付けられる。原田の出陳作品は、『文化展目録』には図版の掲載がないために、原田のいずれの作品なのかの確認はとれないが、ガブリエル・マックスの独自な特徴を強く示すものではなく、むしろミュンヘン・アカデミーの教授であったマックスの根底に認められるアカデミックな要素を多分に含んだ作例と推測される。原田は鷗外の『獨逸日記』で知られるように、留学中にドイツ人女性と親しい関係にあり、鷗外の文学のモデルとなった人物だが、その点に関する指摘はこの展示においては見当たらず、もっぱらドイツ風の作品を制作する画家としての評価に限られている。

美術工芸の出陳の中にはまた、日本から影響を受けたドイツ側の事例として、早稲田大学図書館蔵のユリウス・クルト著『Der Japanische Holzschnitt (日本の木版画)』1921年、同所蔵のユリウス・クルト著『Sharaku (写楽)』1922年、早稲田大学演劇博物館蔵フリードリヒ・ズッコ著『Utagawa Toyokuni und seine Zeit (歌川豊国とその時代)』の書籍が認められる。

このようにこの「日獨文化展覧會」では、日本に所蔵される日独相互に関連する作品が江戸期からの時間軸で出陳されている。そのなかで美術に関係する出陳作品は、全体の数のうえでかなり限定されていた。その内容は陶器などの工芸品や文献そして洋画が認められるが、特に洋画に関してはわずかに2点で、両作品ともに原田直次郎によるものであった。その際に原田はドイツに留学してドイツの影響を受けた画家としてとりあげられている。同時期の日仏の交流において黒田清輝や久米桂一郎などの複数の洋画家が思い浮かぶのに対して、ドイツとの関係ではたしかに原田直次郎以外の画家がほとんど見当たらない。そうしたことが反映していたためか、洋画の展示は少なく、文化交流の文脈のなかで、美術の分野はかなり後退した立場に置かれていた印象が強い。

第3節 1938年「大獨逸國展覧會」の概略

三つ目の交流展としてとりあげられるのが、1938年9月3日から28日まで上野公園内の日本美術協会において開催された「大獨逸國展覧會」である⁶⁾。この展覧会を主催したのは、ドイツ大使館と、日独文化協会、それに東京日々新聞社であった。また外務省、文部省、陸軍省、海軍省からの援助もあり、政府レベルでの展覧会であった⁷⁾。その他に、計画には日独文化協会の主事のドーナード宣伝省展覧会部、彫刻家フロイデンベルク、ザイラー、建築家の蔵田周忠が関わった⁸⁾。

展覧会の目的は、三千年にわたるドイツ文化の歴史的変遷とその特質を、具体的に日本に紹介することとされた⁹⁾。これはすなわち、ナチスの歴史を日本人に認知させることを意味している。ドイツの歴史を三千年に設定していることは、日本も当時は皇紀二千六百年説を提示していたことに関係すると思われる。皇紀二千六百年は「大獨逸國展覧會」の2年後にあたり、ドイツは日本よりもさらに歴史の古い国として、日本に喧伝しようとしたと考えられる。

『大獨逸國展覧會目録』（以下『大獨逸國目録』と略記）からは、「我が国に於ける現代獨逸の展覧會技術を示す最初の実例」と記されていることから、新しい技術を展示している点にも展覧会の特質が見出せる¹⁰⁾。

展示室は11室を数え、第1室から5室までにナチス時代以前の作品が展示され、残り6室には、すべてナチスに直接関係する作品が展示された¹¹⁾。11室目は記念室とされ、フロイデンベルクの制作したドイツの国章が飾られ、ナチスの儀式を行う会場として構成された¹²⁾。この展示構成からも展覧會がナチスに収斂したものであることが理解できる。

具体的にとられた時代区分は、原始ゲルマン時代、民族大移動時代、東方植民時代、中世後期よりプロシアの勃興までの時代、第二帝国の時代、世界大戦期、大戦後の沈滞期、ドイツ精神の革命期までの史的部分と、そして第三帝国との大きく2つに分けることができる。この区分はナチスドイツが「第三帝国」とする所以を示している。

出陳された作品は、歴史的部分では、青銅器時代のゲルマン人の模型から、ドイツ第一帝国の概観図、ルターの95箇条の複写や、ゲーテの肖像、ベートーベンの胸像や楽譜などが展示され、宗教、文化、政治の面からドイツを紹介するものであった。

第三帝国期の部分では、その全貌を明らかにするために写真を屈指して紹介している¹³⁾。まずは第三帝国の台頭の経緯を示し、その後、経済的な側面として生産品やアウトバーンとともに労働者対策のための実績を紹介している。軍事的な面としては、装甲車や戦闘機の写真が展示されたが、この展示は技術的高さを誇示するものでもあった。文化的な面としては、郷土と国民性に結びついたテーマの映画や造形美術作品が紹介され、社会的な面では、母子の保護や、民衆保護事業と、また政策の特徴となった三大教育事業のヒトラーユェグントと労働奉仕制度、国防軍がとりあげられた。

さてこの展覧會の中で、いかなる美術作品が出陳されたのかといえば、図版掲載がないために具体的には確認がとれないが、表記からすると、史的部分では、バンベルクの騎士像（模造写真）、ナウムブルク寺院の寄進者像、ナウムブルク寺院、ヴァルトブルク城、ニュルンベルクの門、中世の騎士の戦いを描いたクラナハの銅版画、ハインリヒ獅子王の墳墓（模型）、ヨースト・アマンによる当時の印刷所の光景、ハンス・ショイフェラインによるパヴィアの戦いの銅版画、オイゲン公の肖像、現ポーランド領のクラクフのファイト・シュトースによる聖母祭壇（模写写真）、アンドレアス・シュリユートルによる大選帝侯の肖像彫刻、シンケルの像、シンケルのベルリンの主歩哨所、シンケルの国立劇場と古博物館と建築アカデミーの設計図、メンツェルのフルートを吹くフリードリヒ、コトヴィエツキによるフリードリヒが老齢になっても軍隊を閲兵する図、メンツェルの平和時代

のフリードリヒ旅行の図、などがある（絵画と彫刻に関して「表2」を参照）。ここでは特にゴシック時代の作品と、また近代では古典主義のシンケルと印象派のメンツェルが支持されていることがわかる。また肖像画のオイゲン公とはオーストリア・ハプスブルク帝国の将軍であり¹⁴⁾、ナチス時代にオーストリアが併合されたために、ここでの出陳となっている。このようにこれらすべては、制作された時代のなかで理解されるものでなく、第三帝国という新たな国家の文脈の中に置かれて出陳されていることが、この展覧会の特徴のひとつといえる。

そしてメインとなる第三帝国下で制作された美術作品として、アルノ・ブレイカーの彫刻作品、デーラーの木版画《筏の旅》、フィンスターの木版画《ホップ砂糖》等3点、カール・ヘンネマンの木版画《小さき森の神秘》、ワルター・クレムの木版画《箱船を出づ》、エリック・リヒターのエッチング《牡牛》他1点、ルドルフ・リーゲの木版画《大森林》他1点、エリザベート・フォイクトの木版画《春》、シュピーゲルの《兵士の肖像画》、その他、ミュンヘンの総統の家やベルリン・オリンピック競技場などの建築の写真や模型が展示された¹⁵⁾。そのなかには日本美術との関係で注目される画家がみられる。それはワルター・クレムである。かれは来日経験のあるエミール・オルリクをとおして日本の影響を受けたダッハウ派の作家として知られる¹⁶⁾。ナチス側はそのことを事前に認知していたのかは不明だが、クレムを選択したことは、日独交流の意味において適確な結果といえる。

第4節 各交流展の意義と政治性について

以上のように3つの交流展をとりあげて具体的な内容を確認したが、そこに出陳された美術作品から、いかなることが読み取れるのだろうか。特に時代的な面から政治性に留意して考察する。

まず1937年の「獨逸國寶名作素描展」は、政治的な支援があるものの、完全な美術作品による美術展として開催されていた。出陳された作家は、展覧会の題名どおりに、歴史的にドイツを代表する作家、すなわちデューラーからはじまり、近代のメンツェツにまで及ぶ著名な作家の作品群を日本に紹介するものであった。しかしながら、作品は素描や版画に限定され、油彩画は一点もなかった。このことは、わずか2年後の1939年にベルリンで開催され、日本の国宝や重要美術品でその多くが占められた「伯林日本古美術展」の場合と比較すると、ドイツ側は、ランクを下げていたことになる。それは日本側の当初の要望が素描展でなく絵画展の開催であったことからまちがいない。日独間の交流を重視していたわりに、ドイツ側には日本に対して不安が存在していたのであろう。その不安の第一の要因とは、おそらく美術作品の運搬にかかわるものと想起される。なぜならば1939年の展覧会の際に日本側も当初は、ドイツへの運搬に大きな不安を抱いていたからである。とはいえ、1939年のときには、最終的には日本からすべての作品がドイツに送られ、そして会期終了後に無事日本に返還されたことを考えると、「獨逸國寶名作素描展」がドイツ政府、外務省、文部省が後援していたとしても、この時点ではまだ両国の政治的な力を利用

してでも当初の意向を実現するつもりはなかったのである。その意味では政治性は薄く、そのことから、逆に、政治性から離れて美術作品を純粹に展示するという本来の目的が強い展覧会だったということもできる。

つぎに1937年の「日獨文化展覧會」は、美術展ではなく、日獨文化交流を示すものであり、しかも日本に所蔵される作品が展示された展覧会であった。ドイツ政府とのかかわりはほとんど見出せず、後援にも両政府は無関係であった。この展覧会は日獨文化協会と、日本でドイツ関係者の意向を受けて、日本人に向けて計画されていたとよい。そのなかで美術作品は、わずかに認められるだけであった。しかしそれらは文化交流を目的にしたものであるために、相当に限定されていた。工芸品、浮世絵の独語版書籍などの出品作品のなかで、注目されるのが、2点の唯一の油彩画が原田直次郎によるものだったことである。原田が選択されたのは、ドイツに留学し、ミュンヘンアカデミーで絵画を学んでいたためであろうが、フランスでの場合にくらべると、明治期に原田以外にドイツの美術学校で学んだ者はほとんどいない¹⁷⁾。原田直次郎はまた、鷗外が『獨逸日記』に記載していたように、ドイツ人女性と親しい関係にあったことから文学の分野でも注目される存在だが、そのことについてはこの展覧会では特に指摘されていない。しかし、その点をむしろ積極的に把握するならば、原田の選択は日獨文化交流に適確な意味を持つ結果といえる。

前述したように、この展覧会の主催や後援に両国政府の名前は見当たらず、政治性がかなり薄い展覧会として一見理解される。ところが、日獨文化交流の出陳作品のなかでその数が多いのが独逸学と軍事関係であり、そしてヒトラーの書簡が展示されていたことから、内容の上では政治性を踏まえた展覧会であったとすべきであろう。

そして1938年の「大獨逸國展覧會」は、展覧会のなかで日獨防共協定の締結をとりあげていたことから伺えるように、日獨間の最も密なる政治的な関係を背景に開催されている。展覧会では、ドイツは日本と同様に三千年におよぶ長い歴史を持ち、また日本にとって手本となる軍事技術や組織を保持した政治体制をとる帝国としての評価が与えられている。またナチスの台頭までのドイツの歴史は主観的に捉えられ、あくまでもナチスの政治政策の正当性を主張するかたちで説明されている。たとえば、三十年戦争の図の説明において、三十年戦争によってドイツが大小の諸侯に分裂し、その後七年戦争、普墺戦争によってプロシアがオーストリアを破ったが、そうした問題に最終的な解決を示したのが、ナチスの独墺合邦とされた¹⁸⁾。あるいはプロイセン帝国はドイツを統一したものの、オーストリアを除外したり、各国家が連邦を形成しただけであったという欠点を持っていたために、最終的な統一とはいえず、この二つの結果を克服して最終的統一をなしとげたのが、アドルフ・ヒトラーによるものであったと主張されている¹⁹⁾。特に人種問題に関して、12、13世紀の東方植民時代が、ドイツ文化の東方伝播を招来し、後にプロイセン帝国勃興に重要な役割を担っていくことが指摘されており、展示された作品からも現在のポーランドのマリエンブルクが植民の中心地とされて、ナチスのユダヤ人東方植民地政策を裏付ける史実の展示として理解できる。またユダヤ人とマルクス主義との結びつきから、国際的ユダ

ヤ人ヒルファーディングとかれに対抗したアルフレッド・ローゼンベルクの写真が比較するかたちで展示されていたり、同様に文化的にユダヤ人によって冒された例として、指揮者のケステンベルクをあげて、それに対して世界の第一級の指揮者にフルトヴェングラーが写真で比較されている。そこには異質かつ劣悪のユダヤ人と正当かつ優秀なるドイツ人という図式が示されている。

このように「大獨逸國展覽會」は、かなり主観的にドイツの歴史を紹介する展覧会であった。ここに出陳された美術作品は、「郷土と国民性とに深い力を求め、新しい力強い造形意志を獲得し、自然に於ける精力の溢れた美しい人間を制作の対象とした」と『大獨逸國目録』には記されている。しかし、実質的にはこうしたドイツの歴史を副次的に肉付けするものであり、美を具現した作品とする性格とは異にしている。日本と緊密な国家関係にあるドイツは、日本にとってもやはり秀でた国としての印象が求められていたといえるだろう。その現れが、ドイツの歴史を三千年とする見方であり、ヨーロッパのなかで大国であるとする主張に認められる。それゆえに「大獨逸國展覽會」はその歴史のなかでいまだ十分に実現できなかった様々な問題を解決した救世主的な存在のヒトラー総統に守られた第三帝国としてのドイツが、展覧会の観者に植え付けらる効果を狙った展示だったといえる。

しかしながら、この展覧会には、日本側が文部省、外務省をはじめ、陸軍省、海軍省まで後援に名をつらねているが、ドイツ側はドイツ大使館と宣伝省のみであり、1937年の「獨逸國寶名作素描展」で関与したドイツ政府は見当たらない。このことから、1937年の展覧会ではナチス政府が直接に関係したにもかかわらず、美術展である性格が強かったのに対して、逆にドイツ政府の後援とされなかった1938年の展覧会の方が、むしろナチスの描く内容を充実させ、展覧会の政治性が強調されていたということがわかってくる。後者では日本側の文部省、外務省、陸海軍省が関与しており、そのことも展覧会の政治性を強く発揮する要因になったといえるかもしれない。しかし、わずかに2年足らずの間に開催された3つの展覧会のなかで、「大獨逸國展覽會」はドイツ第三帝国のプロパガンダとしての性格が最も明瞭に示されており、しかもドイツ側では宣伝省の関与が認められることから、対外的なナチス政府の政治性の強調には、ドイツ政府というよりも、宣伝省が大きな意味を持つ可能性が指摘できる。

おわりに

本稿では、日本で開催された1937年4月の「獨逸國寶名作素描展」と同年11月の「日獨文化展覧會」そして翌1938年の「大獨逸國展覽會」に注目した。従来の指摘ではたとえばこれらの展覧会は日独交流展として考えられ、特に「獨逸國寶名作素描展」と「大獨逸國展覽會」は1939年のドイツでの「伯林日本古美術展」の開催経緯になったとする指摘もなされている。そこで美術作品が文化交流という展示の文脈のなかでいかなる意味を持ち得たのかを政治との関与に留意しながら考察した。その結果、これら3つの展覧会からは、美術品が政治性を担うことによって、その意味と質を変えていることが指摘できる。ただ

し展覧会が政府からバックアップを得ることで、展覧会の内容に政治性が強く反映されるとは限らない。「大獨逸國展覽會」が示すように、日本側からは外務省、陸海軍省、そしてドイツ側では、ドイツ政府ではなく、宣伝省のかかわりが、より具体的にナチス政府を称賛する展覧会となっていた。ここに改めて政治的なプロパガンダとしての展覧会には、ナチス政府のなかで宣伝省が重要な役割を果たしていたことが確認できる。

ところで日独間ではその後三国同盟へとより一層政治的関係を深めてゆく。2年後の1939年に、ドイツ側の意向に応じて、日本側はこれまでにない数で、しかも最良の日本美術品をドイツに運び、「伯林日本古美術展覧會」を実現させたことを考えると、今回の展覧会を概観する限り、ドイツ側は、日本側に対してそれに見合った美術展を行っていたとはいいがたい。ドイツ側からすると、日本に対してドイツ美術の神髄を理解させようとする意図はなく、あくまでも美術はドイツにとって政治的な手段のひとつであったといえる。

なお本稿は科学研究費補助金（基盤研究C）『日本美術受容と政治戦略—ドイツ第三帝国下での日本美術受容の展開—』による研究成果の一部である。

註

- 1) たとえば以下の指摘を参照。西村勇晴「1930年代の日本とドイツ」『芸術の危機、ヒトラーと退廃芸術』（展覧会図録）1995年所収、47頁。
- 2) 『獨逸國寶名作素描展目録』日獨文化協會発行、1937年。
- 3) Martin Warnke: *Geschichte der deutschen Kunst, Spätmittelalter und Frühe Neuzeit*, Bd. 2, München 1999, S.392~408.
- 4) 大久保利武「序言」『獨逸國寶名作素描展目録』日獨文化協會発行、1937年、頁記載なし。
- 5) Hrsg.v.Hans Vollmer: *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart*, Leipzig 1936, S.288. Thieme Becker: *Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler von der Antike bis zur Gegenwart*, Bd.XXIV Leipzig 1930, S.288f. Horst Ludwig: *Münchner Maler im 19. Jahrhundert*, Bd.III S.122ff.
- 6) 宮永孝『日独文化人物交流史 ドイツ語事始め』三修社、1993年、487-488頁。『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年。
- 7) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、2頁。
- 8) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、2頁。
- 9) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、1頁。
- 10) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年。
- 11) 「目次」『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、3頁。
- 12) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、78頁。
- 13) 『大獨逸國展覽會目録』大獨逸國展覽會発行、1938年、51-77頁。
- 14) 山崎宏・兼岩正夫編『世界史事典』評論社、1969年、71頁。

- 15) こうした作品には退廃芸術との比較や、また音楽ではフルトヴェングラーとユダヤ人のケルステンとの比較などの興味深い問題がふくまれているが、その点は別の機会に考察をすすめたい。
- 16) Hrsg. vom Zweckverband Dachauer Galerien und Museen Dachau: *Gemäldegalerie Dachau*, Dachau 1993, S.63f.
- 17) 他に和田英作をあげることもできるが、フランスで学んだ画家に比べると、該当する数が少ない印象がある（たとえば『近代日本美術史におけるパリと日本』（展覧会図録）1975年を参考）。
- 18) 『大獨逸國展覽會目錄』大獨逸國展覽會発行、1938年、17頁。
- 19) 『大獨逸國展覽會目錄』大獨逸國展覽會発行、1938年、24－25頁。

「表1」 獨逸國寶名作素描展覧会出陳作品リスト

図録 番号	作家名	作品名	時代	技法	図版	所蔵
1	アルブレヒト・デューラー	若き男女の図	1490-94	ペン画	○	ハムブルク美術館
2	アルブレヒト・デューラー	ニュルンベルク近きカルクロイトの谷	1494-95	水彩画	○	伯林銅版画蒐集館
3	アルブレヒト・デューラー	龍と闘う男	1498	ペン画		伯林銅版画蒐集館
4	アルブレヒト・デューラー	婦女の図	1503	木炭画	○	伯林銅版画蒐集館
5	アルブレヒト・デューラー	跪ける使徒	1503	毛筆素描	○	伯林銅版画蒐集館
6	アルブレヒト・デューラー	新月を踏む聖母子像	1514	ペン画	○	伯林銅版画蒐集館
7	アルブレヒト・デューラー	幸福の輪 メルヒオール、 プフィンチングの蔵書票	1515頃	ペン画		伯林銅版画蒐集館
8	アルブレヒト・デューラー	鎧の一部の図案習作	1515頃	ペン画	○	伯林銅版画蒐集館
9	アルブレヒト・デューラー	メッヘルンの金工家肖像	1520	ペン画	○	伯林銅版画蒐集館
10	アルブレヒト・デューラー	男の肖像	1521	銅筆素描	○	伯林銅版画蒐集館
11	デューラー?	裳裾を捧げ持つ「死」	1500?	ペン画	○	ワイマール城美術館
12	デューラー?	相愛の百姓夫婦	1502	ペン画		ブレーメン美術館
13a	ハンス・ホフマン	蟻螂と蠅	記載なし	水彩毛筆		伯林銅版画蒐集館
13b	ハンス・ホフマン	金翅雀	記載なし	水彩毛筆		伯林銅版画蒐集館
13c	ハンス・ホフマン	兜蟲	記載なし	水彩毛筆		伯林銅版画蒐集館
14	ハンス・ジュース・フォン・クルムバハ	二人の兵士及び騎乗男女の図	記載なし	ペン画		伯林銅版画蒐集館
15	ハンス・ジュース・フォン・クルムバハ	男の裸体習作	記載なし	ペン画		ニュルンベルク、 ゲルマニア国民美術館
16	ハンス・レオンハルト・ショイフェライン	琵琶を弾く若者	記載なし	ペン画		デッサウ、アンハルト美術館
17	ハンス・レオンハルト・ショイフェライン	盛装せる貴婦人	記載なし	ペン画		伯林銅版画蒐集館
18	ハンス・レオンハルト・ショイフェライン	勝利者としての小児基督、 基督教会の勝利の比喩図	記載なし	ペン画		ヴァルラフ・リヒャルト美術館
19	ハンス・シュプリンググレー	龍を踏む聖マルガレーテ	記載なし	毛筆素描	○	ドレスデン国立銅版画蒐集館
20	ハンス・ゼーバルト・ペーハム	芝生に腰掛けた聖母子の像	記載なし	ペン画		ヴェルツブルク大学、 マルティン・フォン・ヴァグネル 美術館
21	ハンス・ゼーバルト・ペーハム?	山岳風景	1519?	ペン画		ニュルンベルク、 ゲルマニア国民美術館
22	バルテル・ペーハム	嬰兒モーゼを見出す図	記載なし	ペン画		伯林銅版画蒐集館
23	ペーター・フレートネル	水中に戯れる小児の群	記載なし	ペン画	○	ブラウンシュヴァイク、 アントン・ウルリヒ公美術館
24	ハンス・ホルバイン(初代)	芝生に腰掛けた聖母子の像	記載なし	ペン画	○	ハムブルク美術館
25a	ハンス・ホルバイン(初代)	レオナルド・ヴァグナーの像	記載なし	鉛筆画	○	伯林銅版画蒐集館
25b	ハンス・ホルバイン(初代)	アウグスブルク、サン・ウル リヒ僧院長コンラート、メル リンの像	記載なし	鉛筆画		伯林銅版画蒐集館
26	ハンス・ホルバイン(二代)	ハンス・フレッケンシュタイン の紋章のあるガラス絵下絵	1517	ペン画		ブラウンシュヴァイク、 アントン・ウルリヒ公美術館
27	ハンス・ホルバイン(二代)	聖母子像	1519	ペン画	○	ライプツィヒ美術館
28	ハンス・ホルバイン(二代)	美しきフェリス	記載なし	ペン画		デッサウ、アンハルト美術館
29	ハンス・ホルバイン(二代)	短剣の鞘の装飾習作	記載なし	ペン画	○	デッサウ、アンハルト美術館
30	ハンス・ブルクマイアー	勝利品を持てる騎馬	1516	ペン画	○	ヴァイマール城内美術館
31	ハンス・ブルクマイアー	二人の男の胸像	記載なし	木炭画		伯林銅版画蒐集館

図録 番号	作家名	作品名	時代	技法	図版	所蔵
32	ヨルク・プロイ (初代)	クフシュタイン城の攻撃	記載なし	窓ガラス絵		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
33	ダニエル・ホプフェル	聖バルバラ半身像	記載なし	ペン画		エアランゲン大学図書館
34	不明	男の胸像	1510-20	チョーク	○	ミュンヘン国立素描版画蒐集館
35	不明	飾帽を被れる若者の像	記載なし	木炭画		伯林銅版画蒐集館
36	不明	聖セバ스티アン	16世紀前半	ペン画		デュレンベルク、 ゲルマニア国民美術館
37	マティアス・グリュネヴァルト	聖カタリナ	1520頃	木炭画	○	伯林銅版画蒐集館
38	ハンス・バルドゥング・グリーン	左手に球を翳せる女	記載なし	ペン画	○	伯林銅版画蒐集館
39	ハンス・バルドゥング・グリーン	エーベルシュタイン伯ベルンハルト三世並びにゾンネベルク伯家出のクーニグンデ姫の紋章を描きたる窓硝子絵下絵	1526	ペン画		コーブルク城美術館
40	ハンス・バルドゥング・グリーン	数珠を持てる男	1531	木炭画	○	伯林銅版画蒐集館
41	ハンス・バルドゥング・グリーン	牡羊宮の紋章と鎧武者	1534	ペン画	○	伯林銅版画蒐集館
42	ハンス・バルドゥング・グリーン (アトリエ)	基督洗礼図	1510	ペン画		シュトゥットガルト国立美術館 銅版画蒐集室
43	ヨハン・ウルリヒ・ヴェヒトリン (?)	鋸を持てる使徒シモンの像	記載なし	ペン画		デッサウ、アンハルト美術館
44	ハンス・ヴァイディッツ (?)	サムソン、ペリシテ人の殺物畑を焼き払う図	記載なし	ペン画		ゲッティンゲン大学大学内美術史学会
45	ハンス・ヴァイディッツ	馬鹿の木	1526	ペン画	○	コーブルク城美術館
46	不明と記載	岩山の前に闘う二兵士	16世紀前半	ペン画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
47	アルブレヒト・アルトドルファー	荒海を航行する帆船	1515	ペン画	○	エアランゲン大学図書館
48	アルブレヒト・アルトドルファー	騎乗婦人と武装せる従者	不明	ペン画		デッサウ、アンハルト美術館
49	アルブレヒト・アルトドルファー	サムソン空手にて獅子を居る	記載なし	ペン画		伯林銅版画蒐集館
50	アルブレヒト・アルトドルファー (?)	樹木習作	1519	毛筆画		伯林銅版画蒐集館
50a	アルブレヒト・アルトドルファー (?)	樹木習作	1539	水彩毛筆		伯林銅版画蒐集館
51	エルハルト・アルトドルファー	山嶽風景	記載なし	ペン画	○	エアランゲン大学図書館
52	ヴォルフ・フーバー	寺院への道	記載なし	ペン画	○	ゲッティンゲン大学大学内美術史学会
53	ヴォルフ・フーバー	風景	記載なし	水彩毛筆	○	エアランゲン大学図書館
54	ヴォルフ・フーバー	毛皮帽を被れる老農夫	1522	木炭画	○	エアランゲン大学図書館
55	ヴォルフ・フーバー	十字架より降せる基督及び悲嘆の聖母、使徒	1522	ペン画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
56	ヴォルフ・フーバー	マルクス・クルティス	1550	ペン画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
57	ヴォルフ・フーバー	ゴシック寺院内に於ける聖母の死と昇天	記載なし	ペン画		ヴァルラフ・リヒャルト美術館
58	ヴォルフ・フーバー (?)	城砦と橋のある風景	1521	ペン画		ヴァイマール城内美術館
59	ヴォルフ・フーバー (?)	岩山の景	記載なし	ペン画		コンスタンツ・ヴィッセンベルク美術館
60	ゲオルグ・フォン・デイリス	ベンジャミン・フォン・ルムフォルト伯の肖像	1759-1841	色鉛筆画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
61	アントン・グラフ	男の像	1736-1813	木炭画	○	ドレスデン国立銅版画蒐集館
62	カスパー・ダーヴィド・フリードリヒ	テーブルリッツなる城山を望む	記載なし	鉛筆画	○	伯林国民画廊
63	フィリップ・オットー・ルンゲ	海上の基督とペートルス	記載なし	ペン画		ハムブルク美術館
64	アドリアン・ルドヴィヒ・リヒター	落ち穂拾い	1866	ペン画		伯林国民画廊

図録 番号	作家名	作品名	時代		図版	所蔵
65	モーリッツ・シュヴァイント	美しきラウ	記載なし	ペン画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
66	モーリッツ・シュヴァイント	コンラット3世皇帝、聖ベルンハルト・フォン・クレヴォーを背負いて、フランクフルト・アム・マイン寺を出ずる図の人物習作	1844	ペン画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
67	ヨーゼフ・アントン・コッホ	嵐の山景	記載なし	ペン画	○	伯林国民画廊
68	フリードリヒ・オーヴァーベック	女の顔	記載なし	鉛筆画	○	ハムブルク美術館
69	フリードリヒ・オーヴァーベック	川辺の少女	1837	鉛筆画		ミュンヘン国立素描版画蒐集館
70a	フリードリヒ・ヴァスマン	フライブルクのモーリッツ・ロツェの像	記載なし	鉛筆チョーク		ハムブルク美術館
70b	フリードリヒ・ヴァスマン	男の像	記載なし	鉛筆チョーク		ハムブルク美術館
71	ヴィクトル・エミール・ヤンセン	青年の顔	記載なし	鉛筆チョーク		ハムブルク美術館
72	ペーター・コルネリウス	ヨセフ、ファラオの夢を解く	1816	毛筆		伯林国民画廊
73	ユリウス・シュノス・フォン・カルロスフェルト	裸婦	1820	ペン画		ドレスデン国立銅版画蒐集館
74	ユリウス・シュノス・フォン・カルロスフェルト	クリームヒルトの死	記載なし	ペン画		伯林国民画廊
75	ゴットフリート・シャドウ	歌神の頭部	記載なし	チョーク	○	伯林美術館
76	カール・フリードリヒ・シンケル	トリエスト近辺カルスト山中のリュック城	1803		○	伯林ラウハ・シンケル美術館
77	フランツ・クリューガー	歌劇場の観兵式における花売娘の習作	1839	鉛筆	○	伯林国民画廊
78	カール・ブレッヘン	ガシュタイン溪谷と瀧	1829	毛筆素描	○	伯林国民画廊
79	カール・ブレッヘン	伊太利公園風景	記載なし	油彩習作		伯林国民画廊
80a	アドルフ・メンツェル	ポツダム・サンサーシー宮内のフレデリック大帝書斎	1840-42	鉛筆	○	伯林国民画廊
80b	アドルフ・メンツェル	サンサーシー宮内のフレデリック大帝画廊	記載なし	鉛筆		伯林国民画廊
81a	アドルフ・メンツェル	裁断された木幹と大鋸	1847	鉛筆		伯林国民画廊
81b	アドルフ・メンツェル	戸外の階段	1847	鉛筆		伯林国民画廊
81c	アドルフ・メンツェル	丘の道	1847	鉛筆	○	伯林国民画廊
82	アドルフ・メンツェル	板図のある樹木風景	1850-60	鉛筆	○	伯林国民画廊
83	アドルフ・メンツェル	鐵工場労働者	記載なし	鉛筆	○	伯林国民画廊
84	アドルフ・メンツェル	少女の像	記載なし	鉛筆		伯林国民画廊
85	アルフレット・レーテル	跪ける人物の衣裳習作	記載なし	鉛筆		伯林国民画廊
86	アルフレット・レーテル	力	記載なし	鉛筆	○	ドレスデン国立銅版画蒐集館
87	ヴィルヘルム・フォン・コーベル	イーザル河畔の驕者と鄙娘	1831	水彩画		伯林国民画廊
88	ヨーハン・アダム・クライン	驢馬に乗る女	1820	水彩毛筆		ニュルンベルク、 ゲルマニア国民美術館

「表2」大獨逸國展覽會の絵画・彫刻作品リスト

同展覽會目録より絵画・彫刻作品と考えられるものを抽出

*印…絵画、彫刻（写真作品を含む）なのかなどのデータが確定できない場合

図版番号	作家名	作品名	時代区分(目録)
10	記載なし	パムベルク騎士像（模造）	民族大移動時代
11	〃 〃	ナウムブルク寺院の寄進者像（写真）	〃 〃
16-23	ルーカス・クラナハ	闘技の銅版画	〃 〃
18	記載なし	闘技図	騎士文化
22	〃 〃	移住した農民が新しい土地を鋤を以て耕す図（当時の絵画）	東方植民時代
23	〃 〃	新き土地に於ける製粉所の経営（当時の絵画）	〃 〃
29	〃 〃	ハインリヒ獅子侯の墳墓（模型）	〃 〃
33	ヨースト・アマン	活字鑄造工（当時の銅版画）	中世後期よりプロシアの勃興に至る
〃	ヨースト・アマン	印刷工（当時の銅版画）	〃 〃
〃	ヨースト・アマン	製紙工（当時の銅版画）	〃 〃
〃	ヨースト・アマン	製本工（当時の銅版画）	〃 〃
40	ハンス・ショイフェライン	イタリーパヴィアの戦（銅版画）	〃 〃
43	記載なし	サヴォイのオイゲン公の肖像*	〃 〃
45	〃 〃	ヴィーン攻戦の図（当時の銅版画）	〃 〃
47	〃 〃	独逸帝国軍隊のトルコに対する決定的な勝利を描いた当時の銅版画	〃 〃
48	〃 〃	1663年ヴィーン前面に於けるトルコ撃退の図	〃 〃
49	ファイト・シュトース	クラカウにあるファイト・シュトースの聖母祭壇（写真模写）	〃 〃
51	記載なし	三十年戦役の図	〃 〃
53	〃 〃	諸外国のあらゆる軍隊が独逸に来襲し、国内には疫病が流行して苦渋を極める農民の姿を描いた絵画	〃 〃
54	〃 〃	マグデブルクの包囲と占領を描いた当時の銅版画	〃 〃
55	フランク	盗賊の横行（エッチング）	〃 〃
58	アンドレアス・シュリユートル	大選帝侯の肖像*	〃 〃
59	記載なし	プロシア王フリードリヒ ヴィルヘルム一世の胸像*	〃 〃
60	記載なし	フリードリヒ二世の胸像*	〃 〃
61	記載なし	シンケルの像*	〃 〃
66	記載なし	王の連隊が新王フリードリヒ二世に忠誠を誓ふ図	〃 〃
67	メンツェル	フルートを吹くフリードリヒ	〃 〃
69	記載なし	終生プロシアに仕へて功多かりし騎兵將軍ツィーテンが王の前に侍る図	〃 〃
76	コドヴィエツキ	老フリードリヒが、幾多の戦に真価を發揮した彼の軍隊を閲兵する図	〃 〃
77	メンツェル	平和時代のフリードリヒ旅行の図	〃 〃
79	記載なし	カント肖像*	第二帝国成立より1918年まで
80	〃 〃	シルレル肖像*	〃 〃
81	〃 〃	ゲーテ胸像*	〃 〃
82	〃 〃	バッハ肖像*	〃 〃
83	〃 〃	モーツァルト肖像*	〃 〃
84	〃 〃	ベートーヴェン胸像*	〃 〃
85	〃 〃	ワーグネル胸像	〃 〃
90	〃 〃	（ボルジヒ会社）創業者アウグスト・ボルジヒの肖像*	〃 〃
107	〃 〃	コッホの肖像*	〃 〃
109	〃 〃	皇帝ヴィルヘルム一世の胸像*	〃 〃
110	〃 〃	オットー・フォン・ビスマルク侯の胸像*	〃 〃

図録 番号	作家名	作品名	時代区分(目録)
111	〃 〃	伯爵ヘルムート・フォン・モルトケ元帥の胸像*	〃 〃
112	〃 〃	ローン將軍の胸像*	〃 〃
128	〃 〃	ヒンデンブルク元帥の肖像*	〃 〃
129	〃 〃	ルーデンドルフ將軍の肖像*	〃 〃
130	〃 〃	リヒトホーフェンの肖像*	〃 〃
131	〃 〃	ヴェデイゲンの肖像*	〃 〃
132	エンゲルハルト・キフホイザー	世界大戦に於ける印象的場面を描ける戦闘図	〃 〃
133	記載なし	1918年3月21日の突撃の図	〃 〃
200	〃 〃	ゲッペルス博士(肖像)*	第三帝国
201	〃 〃	バイエル山中にあるヒエム湖(絵画)	〃 〃
202	〃 〃	静かなる夕べ(絵画)	〃 〃
203	〃 〃	秋(絵画)	〃 〃
204	〃 〃	ニムフ(彫刻)	〃 〃
205	ブレーケル	彫刻	〃 〃
206	ブレーケル	彫刻	〃 〃
207・1	ヴァイリ・デーレル	筏の旅(木版画)	〃 〃
2	アルフレット・フィンステレル	ホップ砂糖(木版画)	〃 〃
3	アルフレット・フィンステレル	網を干す人(木版画)	〃 〃
4	アルフレット・フィンステレル	ホップの採り入れ(木版画)	〃 〃
7	カール・ヘンネマン	小さき森の神秘(木版画)	〃 〃
8	ワルテル・クレム	箱船を出づ(木版画)	〃 〃
9	エリク・リヒテル	牡牛(エッチング)	〃 〃
10	エリク・リヒテル	犢(エッチング)	〃 〃
11	フリートリヒ・リヒテル	父親(木版画)	〃 〃
12	ルドルフ・リーゲ	大森林(木版画)	〃 〃
13	ルドルフ・リーゲ	自画像(木版画)	〃 〃
14	エリザベート・フォイクト	春(木版画)	〃 〃
209	シュピーゲル	肖像画 兵士(二面)	〃 〃
209	シュピーゲル	〃 〃	〃 〃
222	記載なし	オリンピック写真 1 勝利の女神、国立競技場に於ける立像	〃 〃
233	〃 〃	党旗に囲まれたアドルフ、ヒットラーの胸像*	〃 〃

1937年から1938年の間に日本で開催された日独交流展

Die Ausstellungen für den Japanisch-Deutschen Kulturaustausch in Japan ab 1937 bis 1938—Über die Kunstwerke und ihre politische Führungsqualität

Miyuki YASUMATSU